

藤丸立香は二人いる

かぶりっちょ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人類最後のマスターと呼ばれる兄妹、秩序・悪な性格の藤丸リツカと混沌・善な性格の藤丸りつか。平凡な魔術師と呼ばれた彼と彼女には、一つだけ特異な性質が備わっていた。

『二人の人間藤丸りつかと藤丸リツカは、一人の人間として世界に認識されている』  
「二人で二人、二人で一人」、そんな兄妹が人理修復を成し遂げ、次の戦いを迎えるまでの幕間のお話です。

# 目次

エピソード	1
Episode 1 : 故に私はいねがう	5
Episode 2 : 誰のためのグランド	11
オーダー	15
Episode 3 : 二人で一人 (前編)	



# エピソード

2017年12月24日、カルデア食堂にて。マスターと二体のサーバントがポーカーに興じていた。

「…よし、レイズは済んだな？カードを出すぞ？出しちやうぞ？二人とも降りんなら今のうちですよ？」マスターは落ち着かない様子で語りかける。

「良いですよ、マスター。しかしねそっちこそいいんですかい？」ニヤニヤしながら、完全にこちらの手札を見透かしているかのような緑のアーチャー。

「そうそう！これ負けたらもうレイズ用の種火残って無いですよおー」もう一人の★0真つ黒黒助も煽りをかましてくる。

「うるせつ！あんまり煽ると令呪使うぞゴラ」

「おいおい、大人気ねえぞ内のマスター…バーサーカーか？」

「そっちがその気ならこつちも宝具（イ・パウ）使いますぜ？（笑）」

「ごめんなさいロビンさん。ぐだ男、令呪、使わないアル。」毒に強い耐性を持つ我が身とはいえ、流石に宝具を食らったら爆散する。

「ま、しかして今日は俺の勝ちかな？アンリマユ行きます！Queenのスリーカード

「…どうだ!?!」

「おおつとお?残念!KINGとQueenのフルハウス!」

「んげつ!?!ちよつ…おいロビンふざけるなよお」

「へへへっ、ご馳走様です」

アンリマユはしよぼりした顔で種火をロビンの方に送ろうとした。だがちよつと待ちなさい。

「スピードのストレートフラッシュ」

「おおつ」

「うわっ!ブタじゃなかったんですかいマスター。こりや騙されたなあ」

「あつはつはつ、やったね。これで負債分はちやらになった気がするぜ」

「…んー?あれ、今思い返してみると、トータルで言ったらマスター結構俺達から巻き上げてなあい?人懐っこそうな顔しといて、実は俺と同じくらい黒かったりして」

「失礼しちゃうなーアンリ、こちとら秩序・善の健全マスターだつての。なあ、ロビン?」

「ノーコメントで」

「なるほど、マスターが秩序・善なら似たものの俺も同じかねえ。我こそは、秩序・善のびゅあびゅあ英霊アンリマユなり!」

「あはははは!いいねえ、キレイなアンリ!」

「…抑止力が聞いたら腰抜かすなこりゃ」

多くの英霊が人理修復に伴い、退去したカルデア。今となつては人気のない食堂に、マスター（藤丸リツカ）・アーチャー（ロビンフット）・アヴェンジャー（アンリマユ）の三人の笑い声がやけに大きく響いた。

聖なる夜に相応しくない、騒々しさだ。ただどこうしていないと、カルデアの静けさ、冬の夜の肌寒さが身に染みる。

（寂しさには慣れていたつもりだったんだけどな）

…人理を巡る戦いは終わった。神殿の玉座は沈黙し、かの仇敵は藤丸リツかにとつて、大切な人と共に消え去った。

（これで本当に良かったのかねえ…りつか）悪友サーバントとのポーカーを続けながら、藤丸リツカは双子の妹の事を思った。

「二人で二人、二人で一人」、人類最後のマスターと呼ばれた藤丸立花を表すならば、これ以上に適切な表現はないだろう。魔術師として、良くて中の下の凡人マスターである藤丸立花（達）には一つだけ、特異な性質があつた。それは…

『二人の間藤丸りつかと藤丸リツカは、一人の間として世界に認識されている』

…すまない、多分だけ何を言っているか分からないと思う。ちゃんと順を追つて説明しよう。まずは…：そうだな、どちらの立花が燃え盛るカルデアの中で、マシユの手を

握っていたのか。妹が特異点を踏破したのは誰の為か。そこらへんから語っていき  
かな。

運命の分岐点まで夜はあと2つ。暇つぶしにでもしてくれれば幸いさ。



## E p i s o d e 1 : 故に私はこいねがう

運命にはいくつかの分岐点があると俺は思う。決して引き返せない「流れ」に身を任せる契機を生む、そんな分かれ道。

「藤丸立花」が人理を救ったマスターに成れたのは、そんな分岐を殆どを間違えなかったからだろうよ。

ただ、この分岐点ってヤツのいささか質の悪い所は、何気ない試み（例えば兄妹揃って献血に行ったりとか）が平凡な人生を根こそぎ持っていく所である。

くカルデア炎上事件の3日前く

「リツカ！ 献血に行こうよ！」

赤毛にサイドポニーが特徴な少女が、同じ顔つきの兄妹に話しかける。二段ベッドの上の段から、下の段を除きこんだのでポニーが揺れる。

「何そのCM的な、選挙行こうぜ的な。キミ、赤十字の回しもんかな？」少年は読んでいた本から顔を上げた。

「もーリツカはすぐそういう事言うなあ。」

「減らす口なもんでね、兄妹なんだしもう慣れなよ。ところで、アーモンドチョコいる？」

「あつ！ちようだいっ…うわっ！ちよっ…」

ベツトをのぞきながら、片手を伸ばしたのでバランスを崩して落ちそうになるりつか。

「…危なかったー」

「何一人で盛り上がってんだ（笑）はい、口開けて」

「あー」

少年は少女の口にチョコを入れた。

「ん、おいひー」

りつかは頬を緩ませ幸せそうである。うちのりつかはホントに甘い物好きだな。リツカは妹の頬を指でそっと撫でる。

「それで？献血がどうしたのさ。またユニセフのCMに感化されたの？」

「んーん。でも楽しかったよねリツカ、アフリカボランティアの旅」

一年前、ベツトの上段で『アフリカに行つて来ます、一人だと心細いので探して下さい b y りつか』というメッセージを見つけたときは啞然して3分動けなくなつたわ。

「…パスポート無しでアフリカ行こうと言い出した時は流石だと思いますよ、りつか

さん……」

「だつてさ、困つてる人を助けるとき、自分も幸せに成れるから一石二鳥じゃん！なら国境くらい越えてなんぼでしょ」

「つつてもさあー、俺達は特異な体質のせいで一人の人間として周囲に認識されるんだぜ？りつかだけ海外行かれると他人の認識がえらい事になる」

実際、りつかがアフリカにいつて、俺リツカが日本にいた時、周囲の友だちや隣人が  
どういふ反応をしていたかというと……

アフリカと日本を日帰りで何往復もしている藤丸立花。

というとんでもない事になった。ったく……ややこしい体質だよ全く。もはや、呪いの一種の域とも言える。ま、いいこともあるにはあるがね。

「いーじゃん、人の評価なんてさ。本音でちゃんと話せば分かってくれるよ」

「愛の狂戦士め……んで、次はどこが主催の献血ボランティアなのさ」

「えーと……カル……カル……カルピス？」

「は……」

藤丸りつかはやりたい事の為につっぱしる活発な少女で、良く人に好かれる。身内のひいき目かもしれないが、容姿も中々の美人だと思う。脚長くて綺麗だし。あと年下の子には特に優しいところがあつて、学校の後輩男子から告白されるはずだった。

はず、というのは特異体質の影響でりつかと俺を勘違いした憐れな後輩君は、俺に告白をしてみましたのである。すまん、俺は基本的に男には興味ないゼ☆。

ちなみに、りつかは年上の優しい男性に甘やかされたい願望があると常々語っているので、まあ多分成功はしなかつたろうな。強く生きろよ、少年…

話を戻そう。

「ん？もしかして、カルデア？天文学の観測台で一部で有名な機関だっけ」

「そう！カルデアだよ。ってあれ？リツカ知ってたの」

「魔術師の端くれだからね。ん！…カルデアねえ…」

人理継続保障機関カルデア。アニメスフィア系列の資本がパトロンをやっている星見台という。そこそこの規模の機関なのに、技術革新が起きそうだという噂がある。ついでに言えば、黒い噂もセツトだ。英霊を召喚する依代に人体実験をやっているらしい、とかね。

「黒い噂もあるらしいね、カルデア」りつかが落ち着いた口調で言う。

「！…知ってたのか…ならなんでさ」

「なんで…？もー、リツカ、わかってるでしょー。…一人で二人」

「…二人で一人。はいはい、もうわかってるさ。何度も聞かされてるからね！俺とお前がが親に捨てられたから、同じ境遇の不幸な人を愛してあげたい…か」

「そういう事、寂しい子がいるならさっ！私が手を握ってあげないとね」

「やれやれ、寂しがりやなのはりつかの方だろうよ。頼むから、魔術師の闇に深入りしてケガするの。だけはヤメてくれよ？りつかがいなくなるとは俺が寂しい」

「ふふふっ大丈夫、大丈夫。……ところでリツカ、チョコもつとちようだい」

「えー」

■■県、■■市、児童保護施設■■院での会話だった。

3日後、藤丸立花は住み慣れた施設を離れ、人理保障機関カルデアに生活の拠点を移すことになる。

この時既に、人類最後のマスターたる藤丸立花は人間的に完成していたと言える。

藤丸りつかは愛を与えられなかったが故に、誰かを愛して救いたがった。寂しがり屋の混沌・善の少女。人の痛みが分かるが故に助けたいと希う。

そして：藤丸リツカは愛を知らない。彼は孤独を楽しみ、人の善性を嘲笑う。施設でのなめさせられた辛酸から、冷たい心が彼を作った。「魔術師寄り」な秩序・悪の少年。人の弱さを知るが故に人を殺したいと希う。

※補遺：藤丸立花が施設を離れた日、施設の院長が刺殺されていたのが発見される。

■ 県警の事後調査で判明したことだが、院長は施設内の少年には暴行を重ね、少女には性的虐待を多数していたとの容疑が分かった。

■ 県警は、死体の余りに鮮やかな切り傷から犯人は人殺しの専門家なのではないかと予想した。しかし、施設内の子供にそんなことが出来る訳もなく、首をかしげたと云う。また、犯行現場の周辺には、石灰石で描かれている魔法陣とゾロアスター教の経典が発見されたと報告書に記された。

## Episode 2：誰のためのグランドオーダー

『魔神王ソロモンに焼却された人理を救え。世界を救え。これは、冠位指定（グランドオーダー）である。』

…これを兵役などなく、戦場経験があるはずもない国の、一学生に下す。冷静に考えれば、いくら魔術師のやる事とは言え、客観的に無茶苦茶なのは誰でも一度は思うことだろう。

P T E D、シエルシヨック、トラウマ、身体欠損、精神疾患：

現代の人間同士の戦場ですらありふれている、以上の戦闘に際しての陰惨なリスクの数々。これらは決して空想の産物などではない。

しかも、このオーダーの仇敵は「人間」ですらなかった。…もし仮に、名譽欲だけの為に人理修復を心みたと者が居るとするならば、多分そのマスターは平凡ではないだろう。少なくとも、超人か狂人のどちらかに属すると思われる。

現在、幸いにも藤丸リツカ及び藤丸りつかの両名は、奇跡的にも上記の戦いにおける致命的なリスクによって心身を壊されることはなかった。因みに7つの特異点を超え

るたびに、この幸運には藤丸立花が一番驚いた。だが、更に不思議な事に、命がけの人体修復を課せられたマスターは戦いの最後にはいつも笑っていた。

「あれ？私、五体満足?」りつかが頬に指を当て首を傾げる。

「おかしいな、俺も多分利き腕の一本位持つてかれてると思っただけだな」リツカもアゴに指をやり、同じく首を傾げる。

「先輩！お顔に傷が、早くこのカルデア印の絆創膏を！」気の利く後輩マシユがりつかの顔にペタペタと応急処置を行う。

「うーん頼むぜ立花くん？あれ、おかしいな生きてる？っていうギャンブラーみたいなメンタルじゃこつちがハラハラするからね。君には最後まで生きててもらわないと困る…ぜつ！」万能の権化ダビンチちゃんがリツカのオデコにデコピンをかます。

「あいてっ」

「まあまあ、ダビンチちゃん。二人とも無事でありよりさ。もちろん、マシユと君のこともね。お疲れ様…四人共、カルデアでミルクの入ったコーヒーと僕が待つてるぞう！」カルデアのトップなのに、高圧的な所が全くない優しく労る声が通信機から聞こえる。

「ありがとうドクター…私頑張ったよ…？」りつかが視線をそらし、少し照れくさそうな表情をする。



「ああ、もちろんさ、本当に良くやってくれた。…君は最高のマスターだよ、…りつか」  
「…………えへへ…」 人類最後のマスターははにかんで、サイドポニーを指に絡めた。

これは、第6特異点を踏破した際の、藤丸立花の頭から離れない胸の中の大切な記憶の一つ。特に藤丸りつかにとって、特異点を踏破した直前のこの一時が最も幸せに感じる瞬間だった。

名誉でも、英雄的行動のためでもなく、ただ一人男性に喜んでいて欲しかったから。…彼女が人理を救えたのは、救ったのは、そして彼女が救われたのはロマニ・アーキマンが居たからだだった。

そして、幸せにそうな兄妹の横顔を見つめる藤丸リツカも冷血な魔術師らしからぬ顔をしていた。このときは、このときばかりは、人間の愛とやらを信じてやってもいいかな。なんてことさえ思っていた。

……………ああ、確かに思っていたんだ

7つ目の特異点までは。

すまないドクター。俺だってアンタの事は嫌いじゃなかったよ。淹れてもらった

コーヒーの味を思い出すと、今でも死んだ心が少し蘇る気がする。でも、だからこそ一人でないなくなったアンタを俺は、どうしても許せないんだ。

俺はいい、俺はこのグランドオーダーを楽しめた。人の善性を嘲笑うことも、サーバント同士の戦いも、死の危機さえも、頭のネジが外れかかった藤丸リツカにとっては、愉快でしかなかったよ。俺のグランドオーダーは、俺の為のものだった。

……ただ……藤丸リツカのグランドオーダーは……

……なあ、ドクター。今日この聖なる夜に、リツカが誰といたかったか、アンタしつてたのか……？

## E p i s o d e 3 : 二人で一人 (前編)

「…夢にくらい、来てくれたりするのかなあ…」

藤丸りつかは二段ベットに横たわりながら呟く。時計は午前2時を指し示していた。だが彼女は一向に眠りにつくことができないでいる。

古人曰く、本当に自分を想ってくれている人は、夢にやってきてくれるという。カルデアがまだ活気に溢れていた頃、紫式部が教えてくれた。……分かれている、それは泡沫の夢。あの人は、もういない。ただ一人、死すらを超えた無限の孤独に身をやつして消えていった。

そんな事は分かっている。分かっているんだ…私だって……辛いのは私だけじゃない、マシユもダビンチちゃんもカルデアの仲間たちも…平気そうにしているリツカだって辛いに決まってるんだ。……しっかりしなきゃ……私はカルデアのマスターで、マシユの先輩なんだから…しっかりしなきゃだめだ……

「づっ…うわあああああんあ…ひぐっ…う…どおきたあ…なんで…うううっ…」  
頬を大粒の涙がぼろぼろと流れ落ちた。感情が抑えられない。胸から今まで感じたことがない痛みがする。

藤丸りつかは愛用の髪留めを唇に押しつける。これは、ロマニ・アーキマンの唯一の形見。かつて彼が使っていたものだ。そして、今カルデアに残されている最後の彼の私物だ。

「……………どうして…行っちゃったの…………」

虚しい問いかけに答える者はいない。ただ冬の夜の静けさが佇むだけであった。

兄妹の嗚咽を、藤丸リツカはマイルームの扉越しに聞いていた。

「……………りつか…………」

励まそうにも言葉が見つからない。彼はドアの前に立ち尽くしている。右手にはコーヒー、左手にはアルバムを持って、片割れを慰めに来た彼であった。が、逆に彼女の心を追い詰めるだけな気がしていた。

「あーら、こりや間が悪ったねマスター。出直したほうがいいんじゃない?」

背後から聞き慣れた声が聞こえた。

「…アンリか。霊体化して盗み聞きとは少し趣味が悪いね」

「違うよお、霊体化してんのはロビンの手伝いしてたからだ。…………ロビンからの報告だけど、頼まれてた事は8割方完成してるから確認してくれとさ」

「なる程…了解と言っておいてくれ」

「へいへい…とところでマスター…今更かもしれないけど、なんで俺とロビンだけにこんな準備させてるんだ？ええつと、もう一人の藤丸りつか？ホントにいるのかは俺には分からねえけども、にもこのことは言っていないでしょ？」

「……………」

「おつとつと…勘ぐりが過ぎましたかね??」

「……………ま、いいや。アンリ、てめえとはここに来る前からのつきあいだ…少し位なら話してやってもいいかな」

「わお、てめえときた。大丈夫かマスター。あんた目つきがすごい事になってるぜ。」

「ははは…元からこんな目つきさ、元からね。ま、てめえには特異点7個分の聖杯と、亜種特異点・並行世界4個分の聖杯でつき込んだんだから、いくら最弱サーバントとはいえ働いてもらわなげや行けないしな」

「えつ…何それ、聞いてない」

「お前の宝具と、ロビンの工作。あとは…まあホームズはバリツがあるから良いとして、5人の目のサーバントはりつかの契約下だから計算外だからなしか…。でも足りるだろ。カルデア防衛戦だし、地の利はこつちにあるからな」

「マスター??何の話してんのさ?」

「いや？何でもない。明日になれば分かるさ」

「…何かイヤな予感がする…」

分岐点まで夜はあと一つだけ。藤丸リツカは未来を書き換えるべく、あがく事を決意していた。藤丸リツかの代わりに、今は自分がやるしかない。「二人で一人、一人で二人」生まれてからずっとそうして来た。

……だがもうそうする必要もないかもしれない。例え、藤丸リツカがいなくなったとしても、もう藤丸リツかは一人ではないのだから。

「二人で二人…ね、まったく意味が違う。…ドクターめ、あんな優しい顔して俺を叔父さんにする気だったのかよ」

藤丸リツカは苦笑いしてしまった。今は自分の体の変化に気付いていないリツカも、しばらくすれば検査の結果を知るだろう。

…その時まで、明日の腹立たい消化試合に決着をつけてやらなきゃいけない。